

漢字の情報管理

— JIS漢字と漢字辞典 —

當山 日出夫

花園大学(非常勤講師)

631 奈良市二名6-1492 王龍寺
PK8H-TOYM@asahi-net.or.jp

1. 漢字の属性(意味・字形・音)などを、一義的に決定することは不可能である。
2. 漢字の属性の決定には、漢字辞典の利用が有効である。
3. 最近の漢字辞典は、JIS漢字を中心に編纂される傾向がある。そのため、JIS漢字を批判するための根拠とはなりにくい。
4. 漢字の属性の整理のためには、JIS漢字以外の漢字をふくめた総合的な視点からの考察と調査が必要である。

JIS-Kanji and JIS-Kanji Dictionary

Hideo TOUYAMA

HANAZONO University

Nara-shi Nimyou 6-1492, 631, Japan
PK8H-TOYM@asahi-net.or.jp

1. It is impossible to decide principally the attribute etc. of the kanji (The meaning, the letterform and the sound).
2. The use of the kanji dictionary is effective for the decision of the attribute of the kanji.
3. Recent kanji dictionary tends to be edited mainly in the JIS kanji. Therefore, it is difficult to become the foundation to criticize JIS kanji.
4. For the arrangement of the attribute of the kanji, the consideration and the survey from the synthetic perspective are necessary including kanji other than JIS kanji.

【1】はじめに

本発表に先立つものとして、既に以下の発表を行った。

1. 漢字コードをめぐる諸概念について
(情報処理学会／人文科学とコンピュータ研究会、1994年9月16日、於東北工業大学)
 2. 漢字コードと漢字検索システム
(文献情報のデータベースとその利用に関する研究・日本語テキストデータベースの利用法に関する研究、平成6年度合同研究会、於統計数理研究所)
 3. 漢字検索システムの諸問題
(情報処理学会／人文科学とコンピュータ研究会、1995年5月25日、於総合大学院大学)
- 本発表は、これにつづくものである。

これまでの発表の要点は、次のごとくである。

1. 漢字の属性(形音義)は、一般的に一義的に規定できるものではない。地域(日本・中国など漢字文化圏諸国)や時代(昔の文献か今の文献か)などによって、微妙な差異がある。漢字シソーラスを構築しようと思えば、その適用の範囲をまず限定しなければならない。
2. 漢字について考察する時、その検索方法が重要な意味を持っている。JISにある漢字であっても、利用者が探せない字は存在しないに等しい。漢字の検索方法は、おおむね既存の漢字辞典の配列や索引に準拠している。コンピュータを使ってJISに無い字を検索することは、原理的に不可能である。冊子体で、非JIS漢字まで収録したJIS漢字コード辞典が実用に適している。

以上を総合して、新たな問題設定をするならば……漢字とは閉じていない文字体系であるが、その漢字の諸属性をどのように記述することができるか(あるいはできないか)、ということになる。本発表では、漢字の属性管理という視点から、さらに問題点の整理をこころみたい。さしあたっては、一般に漢字の属性情報の根拠として利用されることの多い漢字辞典について、考えてみることにする。

【2】JISにある字と無い字

具体例について考えてみたい。内田百間という作家がいる。夏目漱石の門下生として有名である。この内田百間について、あるパソコン通信の文章で、このように書かれているのを目にした。人名表記にかかわる箇所だけを引用する(注1)。

内田百ケン(門がまえに月)

この箇所についてどう考えるべきだろうか。この字は、一般には「間」の旧字体・新字体の関係にある。現在通行の「間」が新字体で、月を書く方(門+月)が旧字体である。

それなら、このパソコン通信の文章の著者は、旧字体主義者かということ、そうではない。他の箇所を読むと、むしろ新字体を中心に書かれている。では何故、この箇所だけ、わざわざ「門がまえに月」などと回りくどい表現をしてまで、旧字体で表記しようとしたのであろうか。

考えられる理由は一つ……固有名詞(人名)だから、ということである。

ところで、この字は、通行の漢字辞典やJIS漢字コード辞典類では、どのようにあつかわれているだろうか。代表的なものを調べてみると、以下の通りである。ついでに、同じ部首(門)に所属し、総画数も同じになる異体字として、「閉・閉」についても調べてみる。

- (1). 『新字源』(角川書店、1994年11月改訂版)
 - ・「間」を見出字にして、「門+月」の方を旧字体として、見出字のすぐ下に示す。しかし、「門+月」を独立の見出字(参照見出)には立てていない。
 - ・「閉」は見出字としてかかっているが、「閉」については全く記述が無い。
- (2). 『岩波新漢語辞典』(岩波書店、1994年1月刊)
 - ・「間」を見出字とし、「門+月」は「解字」の項目で説明する。他の新字体・旧字体のあつかいとは異なる。この辞典は、普通の新字体・旧字体の関係は、『新字源』と同様に見出字のすぐ下に列挙する方式である。
 - ・「閉」を本見出として、「閉」を独立の参照見出しとする。「閉」が異体字であることは、「解字」の項目で説明。
- (3). 『デイリーコンサイス漢字辞典』(三省堂、1995年7月刊)
 - ・「間」を見出字とし、「門+月」は異体字として「異体」の項目に示す。
 - ・「閉」を見出字とし、「閉」は独立の参照見出しとして「閉」に連続する位置に置く。
- (4). 『新大字典』(講談社、1993年3月刊)
 - ・「門+月」を本見出として、「間」を参照見出しとする。
 - ・「閉」を本見出とし、「閉」を異体字(同字)として示す。「閉」も参照見出しとしてかかっている。
- (5). 『最新JIS漢字辞典』(講談社、1990年11月刊)
 - ・「間」は見出字としてあるが、「門+月」については全く記載が無い。
 - ・「閉」「閉」ともに見出字としてかかっている。
- (6). 『ワープロパソコン最新漢字辞典』(小学館、1994年4月刊)
 - ・「間」は見出字としてあるが、「門+月」については全く記載が無い。
 - ・「閉」「閉」ともに同じあつかいで見出字にかかっている。相互に異体字関係にあることを注記。

このように、「間・門+月」「閉・閉」のあつかいは、辞典によりまちまちである。差異のポイントは次の2点に要約できる。

- A. 比較的伝統的な編集方針である『新字源』が採用していない「閉」を、もっぱら小型で簡便あることを旨とする『デイリーコンサイス漢字辞典』が採用しているのは何故か。『デイリーコンサイス漢字辞典』の収録字数は約7,000字で、『新字源』の収録字数の約10,000字よりも、かなり少ないにもかかわらずである。
- B. JIS漢字コード辞典類が、「門+月」を無視する傾向にあるのは何故か。

この答えは簡単である。「閉」はJIS漢字にあるが、「門+月」はJIS漢字に無いからである。JIS漢字に無い以上、JIS漢字コード辞典としては、無視するのが原則ということになる。逆に、現在めったに使わない字(「閉」など)であっても、JISにある限りは、他の漢字と同じあつかいで記載しなければならない。

現象の説明は簡単にできる。しかし、このことの持つ意味はきわめて大きい。

【3】JIS漢字と漢字辞典

JIS漢字は、一般の漢字辞典にも影響をおよぼしてきている。上記に引用した漢字辞典のうち、『デイリーコンサイズ漢字辞典』は、その編集方針として、

ワープロ・パソコンを使う際に必須のJIS漢字についての情報も十分考慮にいれ、また、漢字にかかわるデータの情報を、論理的整合性をもって提示することを目指した。(まえがき)

としている。また、『岩波新漢語辞典』は、

今回新たに電子機器に用いられることの多い、いわゆるJIS漢字を中心に漢字字数を増した辞典の刊行を思い立つに至ったのである。(『新漢語辞典』刊行に際して)

とある。

これらの漢字辞典は、ともにJIS漢字である漢字には、コード(区点・16進)が付せられている。漢字辞典にJISコードを付加するのは、おそらく『旺文社漢和辞典』あたりを嚆矢として、今では珍しいことではなくなった。

だが、問題は、漢字辞典にJISコードがついているいないにとどまらず、辞典の編纂方針そのものにまで影響を及ぼす事態に至っていることである。

旧来の編集方針の漢字辞典(『新字源』など)では、特にあつかう程ではないと判断された異体字(例えば「閔」など)についても、JIS漢字の範囲内であるという理由で、単独の見出を持つ字として処理することになってしまう。逆に、JIS漢字ではないという理由で、本来ならば独立の見出を与えられてもおかしくない字(例えば「門+月」など)が、参照見出としても出てこない、というような事態になっている。

極言すれば、漢字辞典がJIS漢字の解説書になりつつある、というのが今の日本の漢字辞典の流れの一つの方向であると言えるかもしれない。これは、はたして歓迎すべきことであろうか。

【4】JIS漢字と漢字辞典の問題点

JIS漢字について多様な意見がある中で特に注目すべきは、豊島正之氏の発言である(注2)。

「JISに無い」字に関しての議論の混乱の源は、その字がJISで他の字体と同一視されているだけなのか、それとも(区別はしているのだが)表内には登録されていないのか、規格自体からは判然としない点にある。上記2の異体字関係が典型で(JIS内に異体字はあるが、別の異体字を使いたい、という場合のこと)、表内に無い異体字は、JISが「区別していない」のか「登録していない」のか、直接的には知るすべが無い。* () 内は引用者。

つまり、言語の「文字観念」はそもそも揺れるものなので、構造的にvaleurが定まる文字観念というのは、実際の言語にとっては単なるフィクションである。

このようにJISの規定の不備を指摘したうえで、古典テキストの翻刻にあたって

文献学的に厳密なテキスト表現のためには、コード表の持つ「文字観念」すなわちコードポイントと、テキスト解釈者(翻刻者)が原本に与えた解釈としての「文字観念」との対応を明確にすることが必要で、その責任は明らかにコード表ではなく翻刻者の側にある。

これらの指摘を参照しながら、JIS漢字や漢字辞典をめぐって、次のような問題点が新たに指摘できるだろう。

- (1). JIS漢字の諸属性は、JIS漢字コード表自身は何も教えてくれない。豊島氏の指摘している異体字の関係にしてもそうだが、漢字の属性として最も基本的な音・訓や意味といった諸要素について、JISコード表は何も規定していない。

確かに、第一水準は代表音訓配列、第二水準は部首画数順配列とはなっている。しかし、これは配列と検索のための便宜と解すべきものであって、これによって漢字の属性が規定されているとは理解すべきではない。

前回の発表で指摘したように、「芸」は第一水準にあり「ゲイ」の音が与えられていることは明らかである。しかし、だからといって、「ウン」と読んで草の名称を表す漢字として使用することが不当であるはずはない。

もっと分かりやすい例としては、第一水準の中に、「一」は「イチ」の音が示されている。しかし、これ以外のこと、つまり「一」には「ひとつ」という訓があり、数字の1を意味する字であるということは、何ひとつ規定されてはいない。これは、コード表を見るものの理解、漢字について知識として、与えられる属性である。

JISコード表は、漢字の属性情報の拠り所としては極めて「不完全」である。

- (2). このように「不完全」なコード表を、何故さしたる混乱もなく現実に利用可能なのか、である。一部に字体概念をめぐって混乱があったり、不平不満の声もある。しかし、そうはいつでも、ワープロやパソコンはJIS漢字でちゃんと機能しているのである。この明白な事実こそ直視すべきである。

「不完全なJISコード表」が現実に機能する理由は何か……それは、社会全体として共有される通行の文字概念があるからだ、としか考えられない。「一」という字について何も規定がなくとも、それが「イチ」という音で「ひとつ」という訓があり、数字の1を意味する漢字だ、ということが、見れば誰にでも分かる、ということである。この当たり前のことが、JIS漢字をめぐすすべての議論の根底に、ほとんど意識されない形で横たわっているのである。(そして、ひょっとすると、この水面下の通行文字概念とでもいうべきものこそが、一番やっかいなしろものかもしれないのである。)

- (3). もしJIS漢字に無い字がテキストに出現したとして、その字の処理については、JIS漢字内部を見るだけでは判断不可能である。テキストの校訂方針にもよるが、許容範囲として利用可能な異体字がJIS漢字内にあって使えるのか、あるいは、まったくJIS漢字には無い字であるのか、JIS漢字内部では判定できない。外部資料を参看せざるを得ない。最終的には、対象とするテキストの表記体系そのものということになるが、一般的には、古辞書類をふくめて各種の漢字辞典であろう。

- (4). 豊島氏の指摘した異体字についての問題は、必ずしもJIS漢字にだけ特有の不備ではない。意図的にすべての異体字を排除した文字セット(教育漢字など)でない限り、この問題は、利用者の側にたって見る限り、常につきまとう。先にあげた例で見ると、『新字源』に「閉」が無いのは、「閉」と同じである(わざわざ掲載する程の字形の違いとは見なさなかった)のか、異体字として別の字ではあるが、採録されていないだけなのか、凡例を読んでも利用者には判然としないのである。これは『大漢和辞典』であっても基本的に同じ問題から逃れることは出来ないし、『類聚名義抄』のような古辞書であっても、同じことである。異体字をふくめて全ての漢字を網

羅するということが原理的に不可能な以上、漢字辞典の宿命であると言えられるかもしれない。

- (5). 本来、情報交換用に制定されたJIS漢字と、一般の漢字辞典とは、まったく別の趣旨によって成立するはずのものである。JIS漢字に無い字をふくみ、あるいは逆にJISにある字でも採用しないこともあり、異体字関係について豊富な情報を提供してくれる、このような漢字辞典があってこそ、JIS漢字の問題点(収録字数・字種・字体)を批判する判断のよりどころとして使える。このような意味では、現行の漢字辞典のうちでは『新大字典』などが、JIS漢字批判の根拠として使える価値を持っている。

ところが、現在、JIS漢字の社会的影響力は多方面におよんでいる。JIS漢字として使える漢字だけが漢字である、という状況になりつつある。そうすると、それをふまえて編纂された漢字辞典は、JIS漢字主体のものにならざるをえない。このような辞典を、JIS漢字批判の論拠として採用できるだろうか。もちろん、JIS漢字コード辞典の類は、原則的にJIS漢字の枠内で編纂されているものである以上、JIS漢字批判を支えるだけの力を持っていないのは当然である。

【5】おわりに

文字というものを無視して人文学の研究はなりたない。研究対象である過去の文献はもちろんのこと、論文執筆などの研究活動において、文字は不可欠である。しかし、この文字は、あたかも空気のように、普段はその存在が意識されることはない。

ところが、コンピュータの利用を契機として、文字というものが改めて意識されはじめてきた。最初は、JIS漢字の制限の中で、研究に必要とする文字が無いという不満に発するものであった。この不満は今にいたるまで解消されてはいないが、JIS漢字をめぐる議論の枠組みには、いくつかの進展があった。

例えば、字形・字体・書体・フォントといった文字についての諸概念の整理がなされてきた。また、JIS漢字そのものについて、文字史的観点から、成立の過程や問題点について調査した論文が、日本語研究を専門とする研究者によって発表されるようになってきている。JIS漢字研究が、言語研究の一つの分野となりつつある。(注3)

人文学研究、特に日本や中国の古典テキストをあつかう分野では、JIS漢字コード辞典は、必需品である。JIS漢字にある漢字をすばやく確認するためにも、また、必要とする字がJIS漢字には無いことを確認するためにも、JIS漢字に対応した漢字辞典を手元におく必要がある。

その一方、JIS漢字の影響は漢字辞典の編纂にまでおよんできている。JIS漢字を批判的に研究するための拠り所をどこに求めるべきであるのかが、新たな課題となりつつある。

このような状況において、JIS漢字とJIS漢字コード辞典については、今後とも注目していかなければならないと思う次第である。

(注1). ASAHIネットの会議室「等々力短信」メッセージ番号2652(等々力短信 第714号 1995.8.5.)

(注2). 「JISに無い字」をめぐる、豊島正之、しにか、1992年2月号(VOL. 3/NO. 2)

(注3). 古典資料、池田証寿、パソコンを使う日本語研究(日本語学7月臨時増刊号)、1995(VOL. 14/NO. 8)

JIS漢字コード辞典リスト(架蔵) 1995年8月現在

A:収録する漢字の範囲 1=第一水準 2=第二水準 補=補助漢字

B:検索方法

C:その他 新旧JIS対照表=新JIS漢字(83年版以降)と旧JIS漢字(78年版)との対照表
新旧字体対照表=JIS漢字内部における新字体と旧字体の対照表

(1)パソコンワープロ漢字辞書

柳澤章喜編 オーム社 1983年9月刊

A:1 B:音訓・部首・総画 C:新旧字体対照表

(2)OA漢字辞典

吉野敏也著 露出版 1985年12月刊

A:1・2 B:部首・総画

(3)ワープロ・パソコン用漢字コード辞典

九段コンピュータサービス編 九段コンピュータサービス 1985年9月刊

A:1・2 B:部首・音訓

(4)ワープロ・パソコンの漢字辞典

黒須重彦監修 日本実業出版社編 日本実業出版社 1986年1月刊

A:1・2 B:音訓・部首・総画

(5)OA時代の新漢字辞典

野本菊雄監修 ぎょうせい 1986年4月刊

A:1・2 B:代表音訓 C:音訓・部首・総画索引、新旧字体対照表

(6)パソコンワープロJIS第2水準漢字辞書

柳澤章喜編 オーム社 1986年5月刊

A:2 B:音訓・部首・総画

(7)三省堂ワープロ漢字辞典

三省堂編修所編 三省堂 1986年8月刊

A:1・2 B:音訓・部首・総画

(8)ワープロ・パソコンのための漢字コード辞典

富士通編 工学図書 1986年9月刊

A:1・2 B:音訓・総画・部首 C:新旧JIS対照表

(9)ワープロ・パソコン漢字辞典

西東社編集部編 西東社 1987年3月刊

A:1・2 B:音訓・部首・総画 C:新旧JIS対照表

(10)パソコンワープロ漢字辞典

上柿力編 ナツメ社 1987年9月刊

A:1・2 B:音訓・部首・総画 C:新旧JIS対照表

(11)パソコン・ワープロ漢字スピード入力辞典

石川譲編 東洋堂企画出版社 1988年6月刊

A:1・2 B:部首(独自方式)・音訓 C:新旧JIS対照表

(12)直感!ワープロ漢字辞典

増田忠編 日本経済新聞社 1990年3月刊 1993年1月刊(増補改訂版)

A:1・2 B:読み(独自方式・正式読み)・総画 C:新旧JIS対照表

- (13)最新OAに強くなる／ワープロ漢字辞典
 学研語学ソフトウェア開発部編 学研 1990年8月刊
 A:1・2 B:音訓・部首・絵画
- (14)最新JIS漢字辞典
 田島一夫監修・(財)日本規格協会編集協力 講談社 1990年11月刊
 A:1・2・補 B:部首・音訓
- (15)三省堂実用ワープロ漢字の辞典
 三省堂編修所編 三省堂 1991年7月刊
 A:1・2 B:音訓・絵画 C:新旧JIS対照表
- (16)ユーザー必携！／早引きパソコンワープロ漢字辞典
 上柿力監修 ナツメ社 1993年4月刊
 A:1・2 B:音訓・部首・絵画 C:新旧JIS対照表
- (17)JIS第1・2水準漢字索引辞書／漢べき君
 高田任康著 ソフトバンク 1993年8月刊
 A:1・2 B:読み(独自方式)
- (18)早引きワープロ漢字辞典
 小和田顕監修・旺文社編 旺文社 1993年9月刊
 A:1・2・補 B:絵画・音訓・部首
- (19)「見る」「引く」簡単／パソコンワープロ漢字コード辞典
 実教出版出版部編 実教出版 1993年12月刊
 A:1・2 B:絵画・部首・音訓
- (20)ワープロ・パソコン／最新漢字辞典
 小学館辞典編集部編 小学館 1994年4月刊
 A:1・2・補 B:音訓・部首・絵画 C:新旧JIS対照表 *補助漢字は別に掲載(部首順)
- (21)コンサイスワープロ漢字辞典
 三省堂編修所編 三省堂 1994年9月刊
 A:1・2 B:音訓・部首・絵画 C:新旧JIS対照表
- (22)読めない漢字がすぐ引ける／ワープロ・パソコン漢字辞典
 荒川幸式著 日本能率協会マネジメントセンター 1995年5月刊
 A:1・2 B:読み(独自方式)